

(様式 6)

2025 年 12 月 4 日

令和 7 年度博物館専門職員等在外派遣事業実施報告書

文化庁次長 殿

住 所 〒181-8585 東京都三鷹市大沢 3-10-2
国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館

氏 名 千徳佐和子

令和 7 年度博物館専門職員等在外派遣事業の実施結果について、下記のとおり報告
します。

1 派遣期間 2025 年 11 月 10 日 ～ 2025 年 11 月 17 日

2 派遣概要

(1) 派遣先名称

名称 : 27th ICOM General Conference 2025@ Dubai

(国際博物館会議 第 27 回 ICOM 総会)

大会テーマ…急激に変化するコミュニティにおける博物館の未来

開催地 : アラブ首長国連邦 ドバイ世界貿易センター

開催期間 : 11 月 11 日～11 月 17 日

(2) 派遣内容

2025 年 11 月 11 日から 17 日にアラブ首長国連邦・ドバイ世界貿易センター (図 1)
で開催された 27th ICOM General Conference にて、筆者は保存科学を学ぶ学芸員補佐
として、①日本の文化財の保存修理について世界の参加者へ発信するための通訳とし
て活動したことに加え、②日本で文化財科学関連分野に携わる若手研究者として自身

の研究内容を発表したことで、文化財保存分野における日本のプレゼンス向上に貢献した。

11月11日から17日に開催された同大会は、「急激に変化するコミュニティにおける博物館の未来」をテーマとして、「無形文化遺産」、「テクノロジー」、「若手」がサブテーマとして設けられていた。11日は大会開催前のPre-conference Programmeが行われた。12日（大会1日目）より14日（同3日目）までは、ドバイ世界貿易センターにて、午前中は「General Scientific Programme」として基調講演やパネル・ディスカッション、メンタリングやネットワーキングセッションが行われ、午後は「International Committees Session A～C」として各委員会やジョイント・セッションによる発表が行われた。15日はInternational Committees Dayとして委員会ごとに研修や研究発表が行われ、16日と17日はExcursionとして設けられていた。私は12日から16日にかけて、同大会に参加した。

①の通訳業務としては、11月12日（同1日目）13:00～14:30のSession Aにて行われた、ICOM CONSERVATION（保存国際委員会、旧略称 ICOM-CC）と ICOM 日本委員会のジョイント・セッションにて、通訳・翻訳業務を担当した。同セッションは、3名の発表（各20分）と質疑応答（20分）により構成された。最初に、ICOM 日本委員会の栗原祐司氏より日本の文化財の保存や現状の総括的な内容が説明された。続いて、公益財団法人美術院所長の岩下淳氏より木造彫刻文化財の保存修理について、一般社団法人国宝修理装飾師連盟理事の橋本浩氏より装飾文化財の保存修理について、それぞれの理念や技法、課題や若手の育成について発表があった。私の仕事は、当日としては、岩下氏の発表の同時通訳、並びに質疑応答の逐次通訳を担当した。そして、当日に向けての事前準備としては、岩下氏と橋本氏の発表の要約やスライド資料、発表原稿の翻訳と英文校正、並びに、大会の運営担当や ICOM CONSERVATION の委員と行われる英語のやり取りの通訳・翻訳を担当し、発表の内容を世界からの参加者に伝えるためと、セッションを円滑に行うための補助として活動した。彼らの発表内容を英語で発信できたことで、世界の参加者に日本の技術を発信することに成功し、日本のプレゼンス向上に貢献した。

また、②の若手研究者としての発表は、11月13日（同2日目）14:30～16:00に行われた ICOM-ASPAC（国際博物館会議アジア太平洋地域連盟）Public Sessionにて、5つ行われた Keynote speeches の内の一つとして、日本並びに大会のサブテーマの一つであった「若手」の代表として、発表を行った。発表は、“The Future of a Young Researcher’s Challenge in the Conservation of Blueprints” というタイトルで、日本で文化財保存の研究に関わる若手として、自身が行っている青図資料の保存に関する研究や、若手研究者としての課題や将来の展望について発表した。

その他には、翌14日（同3日目）に行われた “Curated Networking for Young Researcher’s Unite” に参加し、ICOMに関わるの若手学芸員ならびに研究者と交流を深め、今後に向けてネットワーキングした。15日の International Committees Day

では、UMAC（大学博物館とコレクション国際委員会）のセッションに参加し、大学博物館の職員として、シャルジャ・アメリカン大学を見学し、他大学の事例を学び、ネットワーキングを行った。また 16 日に行われた大会主催の Excursions や大会が開催されていない時間に、ドバイ首長国内の博物館（未来博物館、エティハド博物館、アル・シンダガ博物館、Dubai Police Museum）にて研修見学を行った。特に印象に残ったのは、アル・シンダガ博物館の香水に関する展示だった。大会のサブテーマの一つであった「無形文化遺産」に関心が高まっていることに並んで、「香り」の保存についても近年関心が高まっていて、文化財科学関連分野でも研究が少しずつ進められている。これまでに香りを扱った展示を実際に観る機会は少なかったもので、保存科学に関わる身として、香りの保存や展示方法が大変興味深かった。



図1 大会の会場 (a) ドバイ世界貿易センター、(b) 会場にいる筆者
(画像：(b) 参加者による撮影)

(3) 派遣成果

① 11月12日 13:00～14:30 Session A ICOM Conservation 通訳・翻訳業務

ICOM CONSERVATION は、ICOM の中で最も規模の大きい国際委員会で、会員が約 5000 人いる。会場は、各委員会のセッションとしては比較的に大きめの約 300 席を収容できるドバイ世界貿易センター内の Sheikh Rashid Hall A で行われた。最も大きな成果としては、私が登壇者の発表を翻訳、通訳したことで（図 2 (a)）、発表内容が英語で伝わり、英語に通訳したことで更に現地の通訳によってアラビア語、フランス語、スペイン語で発表内容を伝えることができたことだ。文化財の保存は、科学技術の発展により時代と共に多様化し、その方法や理念は変化すると考えられるが、日本においては、国宝や重要文化財の修理は、国が認定する「選定保存技術」を持つ者が担う等、本セッションにおいて ICOM CONSERVATION により「伝統的」とされるような日本の修理技術や理念の尊重、後世への伝承が大切である。国によって文化財を保存するための制度や法律、理念や技術が異なる中で、日本の文化財の保存修理の方法や理念、科学との結び付き、課題、後世への伝承を本セッションにて伝えることは、多様化する世界の保存修理技術を考える上で、意義深いと考えられる。日本の保存修理の理念や技術を世界の人に彼らがわかる言葉で伝えたことで、日本のプレゼンス向上に貢献した。

登壇者による発表後の会場の参加者からの質疑としては、科学分析の具体的な応用方法や修理技術者の訓練制度に関する質問があった。特に訓練制度については、10 年間かけて一人前と認められる試験制度が西洋の修理技術者の育成とは異なり、日本の独特な制度として関心を寄せる意見があり、西洋との違いや、西洋の修理技術者とコラボレーションすることの可能性などについて登壇者に意見を求める質問があった。橋本氏の回答では、一般社団法人国宝修理装飾師連盟は、加盟工房は株式会社であることの説明があり、株式会社として国宝や重要文化財の修理を担うことについて、彼らの技術が各工房内ではなく、外部から評価を受けることが大切である旨を説明された。そのため、一般社団法人国宝修理装飾師連盟の修理技術者に設けられている試験については、各工房内で評価されるのではなく、文化庁が評価者であるという。日本の制度が、国宝や重要文化財を大切にするための制度であるということが世界の参加者にわかりやすく伝わったように感じる。海外では、国によっては例えば芸術アカデミー等を修了していることが修理技術者の信頼性を示す基準になっている場合がある等、「信頼」の評価方法は国によって様々であると感じる。日本においても「保存科学」の分野では、現在は修士課程・博士後期課程の制度に沿ってはいるが、どのような育成方法が適切であるかは常に検討の対象になっており、日本の修理技術者の育成として試験制度が重要であることが深く理解できたことについては、今後も文化財科学関連分野に携わりたいと考え、修理技術者と多々関わっていくことが予想される身として、そして将来は自身も文化財科学関連分野の研究者の育成に関わりたいと考える身として、学び深い議論であった。

また、今回のセッションの通訳を担うにあたって、当日を迎えるまでの準備や翻訳にも深く関わらせていただいた。具体的には、橋本氏と岩下氏の発表内容の要約とスライド、発表原稿の翻訳や英文校正を担当した他、同セッションの準備を目的とした事前ミーティングでは通訳を担当し、ICOM CONSERVATION の委員や大会の運営担当者から送られる英語の案内を日本語に翻訳するなどの補助を行った。特に、発表内容の要約やスライド、発表原稿の翻訳を行う際は、橋本氏と岩下氏と何度も会話を重ね、英語に翻訳した際に誤解がないように、修理の技法や理念について、丁寧に確認を行った。その中で特に勉強になったこととしては、一般社団法人国宝修理装演師連盟では、「修理」という言葉を「restoration」ではなく、「repair」を使用して翻訳されるということだった。日本の文化財保存修理は、現状維持を原則としていて、文化財が持つ価値を損なわないように、可能な限り先の後世まで残すことを目的としている。そのため、欠損箇所を復元するような、表現を加える処置はしないのが原則である。「Restoration」という言葉は「復元」の意味が含まれると考えられているので、一般社団法人国宝修理装演師連盟では「repair」を使用されるということだ。会話を重ねる中で、一般社団法人国宝修理装演師連盟や公益財団法人美術院が大切にされている言葉やそこにある修理の理念について深く学ぶことができた。翻訳や通訳の機会を今後頂いた際や論文を執筆する際などには、言葉一つひとつの意味を大切にしたいと改めて感じた。

最後に、本セッションを通して一般社団法人国宝修理装演師連盟の橋本氏や公益財団法人美術院の岩下氏、ICOM CONSERVATION の役員を務められている Kate Seymour 氏や Stephanie de Roemer 氏、榊玲子氏（図 2 (b)）と一緒にセッションに取り組むことができたことは、文化財保存修復学会や ICOM CONSERVATION と今後も深く関わっていきたい筆者にとっては人脈を広げられる貴重な機会であった。Seymour 氏とは、「来年の Oslo 大会でまた会いましょう！」と会話するなど、近い将来に行われる大会や今後に関わる人脈を築くことができた。

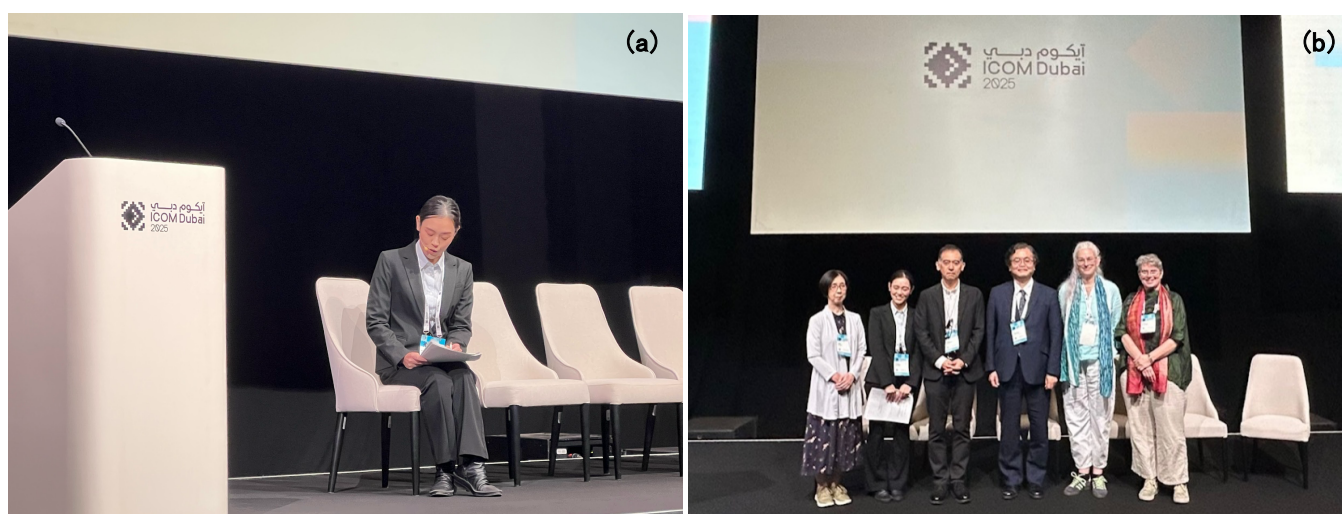


図2 ICOM CONSERVATION と ICOM 日本委員会のジョイント・セッション

(a) 通訳を行う筆者、(b) 本セッションの登壇者・企画者

(画像：(a) 当館学芸員による撮影・提供、(b) 会場スタッフによる撮影・Kate Seymour 氏による提供)

② 11月13日 14:30～16:00 ICOM-ASPAC Public Sessionにて発表

ICOM-ASPAC は、アジア太平洋地域の連盟で、私が発表を行った Public Session（会場：ドバイ世界貿易センター内 Dubai A, B）では、私を含めて5件の Keynote Speeches があった。筆者以外は、ICOM マレーシア委員会委員長の Datuk Kamarul Baharin bin A. Kasim 氏と Zhejiang Intangible Cultural Heritage Museum 創設者の Yi Guo 氏、ICOM-IMREC（International Museum Research and Exchange Centre）委員長の Carol Ann Scott 氏、ヴィクトリア大学ウェリントンの博物館学と文化財研究学 Director の Conal McCarthy 氏が発表された。筆者は、同セッションにおける日本からの唯一の発表者であり、大会サブテーマの一つであった「若手」の唯一の発表者として、日本の若手代表として発表を行った（図3(a)）。

博物館で勤務しながら、東京藝術大学大学院の博士後期課程にて日本学術振興会の特別研究員 DC1 として文化財科学関連分野の研究を行う身として、“The Future of a Young Researcher’s Challenge in the Conservation of Blueprints” というタイトルで、日本で文化財保存分野に関わる若手としての課題や挑戦、今後の展望について発表した。日本で活躍する若手として発表したことで、日本の若手の育成についてプラスの印象を世界の参加者に与えられていたら、日本で行われている様々な支援の恩恵を日々受けている筆者としては嬉しく思う。

発表後の反響としては、質疑応答の時間に、ICOM への若手の参加を促進するために必要なこと、ICOM として実施すべき取り組みについて質問を頂いた。私は、ICOM General Conference 並びに、関連大会に今回初めて参加したが、参加したことで人脈が広げられ、発表内容について様々な国の専門家からフィードバックを得られたことで、今後益々精進するための意欲と、ICOMに関わりたいと思う元気やエネルギーが貰えた。そのため、筆者の回答としては、ICOMの大会に若手に積極的に参加してもらうことの重要性や、ICOM大会内で若手が発表できる場を増やすことで若手が参加しやすくなるのではないかと意見を述べた。同セッションに参加し、若手として発表したことで、各国で若手の参加に悩んでいる現状を知ることができた。また、同じく質疑応答のセッションの中では、他の発表者の回答の中で、無形文化遺産の保存の課題の一つに、若手が無形文化遺産に興味を持ちにくい現状が説明されていた。筆者は、文化財保存に関心のある方が多い環境に身を置くことが多いからか、日本においては、世代による無形文化遺産への関心の程度の違いを強く実感していないが、議論を聞く中で、無形文化遺産の保存への関心が世界的に高まっていることを実感した。地域の博物館で目にしたことや自身の研究との関係については、「④ 15日 IC Day、並びに 16日 Excursion を通した動向調査」で追って説明する。

最後に、本発表の成果の一つとして、人脈を広げられたことがある（図3(b)）。発表を聞いた方から「自身の国でも若手が積極的に参加できるような環境を整えたい」として、「そのために今後も意見を聞きたい」と名詞を頂戴した。日本の若手のプレゼンスだけでなく、「ICOMにもっと若手に参加してもらいたい」と思ってもらえる機

会になっていたら、嬉しく思う。また、自身の青図資料の研究に興味を持ってくれた参加者もあり、青図資料の保存や研究に関する問い合わせを目的とした名刺交換もあった。自身の文化財保存学分野におけるキャリアとしても、自身の研究のプレゼンス向上に繋がる機会となり、自身の研究の益々の発展に向けた有意義な交流を築くことができた機会だった。



図3 発表を行った ICOM-ASPAC Public Session の様子

(a) 筆者が発表する様子、(b) 発表後の本セッションの様子

(画像： (a) 当館学芸員による撮影・提供、(b) 本学非常勤講師による撮影・提供)

③ 11月14日9:45～11:45 Curated Networking for Young Researcher's Unit の参加を通じた若手のネットワーキング

大会では、メイン会場 Rashid Hall で行われるパネルトークやライトニングトークと並行して、様々なネットワーキングやメンタリングセッションが行われた。その内、11月14日（大会3日目）に行われた Curated Networking for Young Researcher's Unit（会場：Hall 5）に私は参加した（図4(a)）。このセッションは、数年前から ICOM ドイツ委員会を中心に企画が進められていたネットワーキングセッションのようで、世界の博物館や文化財分野で活躍する若手が交流するための機会として、本大会にて第1回目のネットワーキングとして開催された。その場に、私は唯一の日本人として、セッションに参加した。

セッションは、イントロダクション、パネルディスカッション①、グループワーク（図4(b)）、パネルディスカッション②、クロージングのプログラムで構成されていた。イントロダクションでは、先述のような ICOM ドイツ委員会を中心として企画された若手のネットワーキングを目的としたセッションであるなどという本セッションの背景や目的に関する説明があり、パネルディスカッションでは、アラブ首長国連邦、ドイツ、シンガポール、バルバドスなどで活躍する6人の若手が代表として「ICOMにより多くの若手に参加してもらうには何ができるのか」というテーマをもとに、若手としての苦労や意気込みに関するトークがあった。前日の ICOM-ASPAC のセッションの自身の発表後にあった質問や意見とも繋がり、同年代の会員が感じていることや考えていることが共有できるセッションだった。ICOM の組織について、既に存在する組織の構成や人間関係の中に若手が入り込むことの難しさを感じるという意見や、そもそも国からの支援が少なく、学会に参加するための渡航費などを確保できないという意見もあった。一方、ICOM 大会に参加するからこそ感じるエネルギーや、世界の博物館関係者や同世代の学芸員や研究者と交流することで得られる知識や繋がりから、より積極的に ICOM に関わりたいとする意見が多かった。そして、若手に参加しやすいと感じてもらいたいという思いが、セッションに参加した若手に共通していて、今後 ICOM に関わっていくための人間関係や方法が築ける場であった。「ネットワーキング」というセッション名だったことから、セッションの参加者は若手が多かったが、若手が参加しやすい環境を整えるためには、より幅広い世代の会員に聞いてほしいと筆者は感じた。

今後の活動に繋げるため、クロージングでは ICOM ドイツ委員会が中心となって構築した若手のネットワーキングや今後の企画を検討するためのメーリングリストの案内があり、筆者はそのグループに参加した。本セッションの続きとして、12月10日にアフターミーティングが開催されるようで、日本の若手会員として参加を試みたいと考えている。



図4 Curated Networking for Young Researcher's Unite の様子
 (a) 集合写真、(b) セッション中のグループワークの様子
 (画像：(a)、(b) 会場スタッフによる撮影)

④ 15 日 IC Day、並びに 16 日 Excursion を通した動向調査

15 日の IC Day では、UMAC のセッションに参加し、シャルジャ・アメリカン大学の大学図書館を見学した。世界の大学博物館の学芸員や関係者と交流し、発表を聞く中で、各国の学芸員を育成するための学生の教育や予算のやりくりについてなど、大学博物館という自身の所属と近い環境における他国の例を学ぶことができて、客観的に自身が所属している国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館について考えることができた。各大学の専門家や予算の不足、学芸員育成のための学生の確保や実習の方法に関する課題等を聞く中で、自身が所属する博物館の学芸員が少ない人手の中で、丁寧に精力的に博物館の運営と発展、学芸員の育成を行なっていることを改めて実感した。例えば、博物館の予算については、大学との調整だけでなく、文化庁が行う

Innovative Museum 事業等に応募し、博物館の機能強化のために、自ら予算を確保する努力を行っていることや、博物館の存在をより多くの人に認知いただき、来館いただくために、学内外にポスターやチラシを設置するだけでなく、年に 3 回開催される特別展示では、展示に関連した公開講座や大学の教員の話が聞けるランチタイムトーク等のイベントを毎回開催していて、当館の展示や大学により興味を持っていただき、博物館に足を運んでいただけるような工夫を行なっている。また、大学博物館としての学芸員の育成としては、博物館の経営や運営、資料保存等の役割について学座学に加え、実技を学ぶ博物館実習では、8 日間の実習を通して、当館の展示室にて展示の撤去や設営を当館学芸員の丁寧な指導のもとに実資料を扱って博物館の業務を学ぶことができるように工夫されていて、他例と比較をしてもとても丁寧で濃い博物館教育を行なっていると感じた。当館の学芸員補佐として働く身として、自身が所属する博物館の良いと思うところは守り続けたい。同時に、時代の流れや傾向も把握し続けられるよう、今後も大学博物館に関する情報を怠らないように、今回のような大会やセッションに参加するなど、情報収集を努力し続けたいと思った。

16 日の Excursion では、オールド・ドバイのツアーに参加した。前日の UMAC セッションで一緒だったメンバーも多く、より関係を深められたことに加え、ツアーの中では、旧市街やその地域の博物館を巡ることができた。中でも印象的だったのは、アル・シンダガ博物館の香水に関する展示だった。アル・シンダガ博物館の香水の展示は、Sheikha Sheikha bint Saeed Al-Maktoum（ドバイの現統治者、アラブ首長国連邦の現副大統領 H. H. Sheikh Mohammed bin Rashid Al Maktoum の叔母）の旧住居の一つであった建物を展示室として使用している。ツアーの中で受けた説明では、背景として、アラブ首長国連邦の人々にとって、香水は古くから親しまれているものだという。現在においても男性も女性も香水を身に着けるが、古くは、女性は自身の香水を調合し、各家庭でその香りを使用していたため、各家庭にその家の香水のレシピと香りが存在する文化のようだ。男性も女性も、外出する前に香りを焚いて、肌や衣服を香り付けてから出掛けることが一般的なようで、そのため、アラブ首長国連邦の人々にとって香水はとても身近なものだという。香水の展示は、最初の展示室では、アラブ首

長国連邦で頻繁に使用される香水について、地域の原料や輸入される原料の標本や画像、解説とともに展示されていて、実際にそれらの香りを嗅ぐことができる展示となっていた。奥の展示室には、香水が好きで、香水のコレクターとしても著名であった Sheikhha Sheikhha bint Saeed Al-Maktoum のコレクションが展示されており、香炉や容器の他、Sheikha Sheikhha bint Saeed Al-Maktoum が調合されたとされている香水が展示されていた。

香りの保存に関する研究は、文化財科学関連の分野においても近年耳にする機会が増えているが、実際に展示として観るのは初めての体験だったので大変興味深かった。香りは目に見えない物質であり、拡散するため、展示室においては同じ空間に展示されている資料に悪影響を及ぼす可能性が考えられ、展示環境においては好ましくない物質として考えられる。一方、文化財として登録されている例はまだないが、香りを文化財として保存することを試みる例が近年確認されており、Cecilia Bembibre 氏に関わるセントポール大聖堂の図書館の香りの保存や、クラクフ国立博物館とスロベニア国立博物館の共同で行われている「Odotheka」というプロジェクトがあり、歴史的遺産の香りを科学的に分析し、アーカイブ化するという取り組みがある。ただ、文化財として考えるためには、香りを定義する必要があるが、香りは記憶との結びつきが強く、感じ方に個人差があることや、目に見えない物質であること等から、現時点では香りを定義するために課題が残る。文化財科学関連の分野でも、香りの物質の特定や、ガスクロマトグラフ質量分析計（GC-MS）のカラムから成分を採取し、においを嗅ぐ分析方法や官能試験が報告されているが、においの数値化は課題を感じる。様々な課題はあるが、その研究の重要性を展示を通して改めて実感し、今後様々な文化財の保存に関わりたい身として、その現状や必要性を調査することができた。



図5 Excursion で見学したアル・シンダガ博物館
(a) 博物館の外観、(b) 香水の展示の様子
(画像：(b) 参加者による撮影)

（４）成果の活用計画

今回、通訳や発表者として参加の機会をいただいた ICOM CONSERVATION と ICOM-ASPAC については、今後も積極的に大会に参加したい。特に ICOM CONSERVATION については、2026 年にオスロ大会が予定されている。自身の文化財科学関連分野の研究としては、同大会でのポスター発表に申し込んでいるため、自身の青図資料の保存の研究を通して保存科学分野の発展に貢献したいと考えるとともに、今回築いた交流を継続できるように努力したい。

14 日（大会 3 日目）のネットワーキングセッションにて得られたの若手の繋がりにについては、まずは 12 月 10 日のアフターミーティングに参加し、今後の動きを確認したい。今後も可能な限り参加し、ICOM の若手会員の参加の促進やネットワーキングのセッションの企画等に関われたらと考えている。

16 日に学んだにおいに関する研究については、今後自身の研究に活かしていきたい。自身が研究の対象としている青図資料の一種であるジアゾタイプは、現像の工程でアンモニアを用いる場合があることから資料からアンモニアが揮発することが報告されている他、害虫対策を目的とした燻蒸処理を行うことで異臭が発生することが報告されている。私の場合は、香りを保存することが目的ではないが、ジアゾタイプの保存や展示を検討した際に、におい物質を特定する必要があるため、目的は違うが必要とする分析手法や評価方法は類似しており、自身の研究においてこの度の調査は大変勉強になった。

最後に、今回目にしたこと、体験したこと、感じたことは、全て自身が所属する湯浅記念館の職員に共有を予定しており、国際基督教大学博物館湯浅記念館として今回得たことを活かしていく。また、当館は大学博物館なので、学芸員課程を履修する学生と交流がある。これまでに授業の 1 コマを自身の研究や同大学の卒業生としての卒業後の進路について話す機会をいただいたので、今後も同様の機会には、今回の ICOM 大会の参加について学生に話したい。また、今後も継続的に ICOM 関連の大会に参加することで、日本のプレゼンス向上に貢献できたらと考える。

(5) その他

まずは、この度の 27th ICOM General Conference の参加をご支援いただきましたことに、この場をお借りして感謝を申し上げます。ICOM の大会に参加するのは、今回が初めての機会であり、12 日から 16 日にかけて、大会に参加したすべての日が大変学び深い時間だった。毎日異なるグループの方々と交流できた。12 日（大会 1 日目）は文化財保存や文化財科学関連分野に関わる学芸員や研究者、13 日（大会 2 日目）はアジア太平洋地域に所属する学芸員や研究者、14 日（大会 3 日目）は世界の若手学芸員や文化財関連分野で活躍する若手研究者、15 日は UMAC セッションを通して世界の大学博物館の関係者と交流し、16 日は現地の博物館の動向調査を通して、これまでに体験する機会が少なかった新しい展示を体験することができた。毎日異なる分野や専門、国や地域、世代の博物館関係者と交流する中で、改めて博物館や ICOM に関わる人の多様性を実感した。多方面に人脈と知見を広げられる機会となった。

また、今回の大会の中では、栗原祐司氏が ICOM Executive Board に選出されたことや、筆者の上司である福野明子氏が ICOM-ASPAC の Secretary に選出されるなど、ICOM で日本人が活躍する様子を目の当たりにした。彼らの努力の上で、ICOM における日本のプレゼンスがあることを実感し、日本の「若手」として参加の機会を頂いた身として、彼らの努力を若い世代に広く伝え、今後に繋ぐことの責任を強く感じた。ICOM 大会に初めて参加し、ICOM の若手のネットワークにも初めて参加した身であるので、まだ未熟な身ではあるが、今大会を通して得た実感や知識、人脈を今後に活かし、博物館関係、並びに文化財保存分野において、将来的に日本のプレゼンスに貢献できるように、益々精進したいと思える機会であった。改めて、事業の実施により、多大なご支援を頂戴し、今大会に参加できましたことに、心から感謝申し上げます。

※なお、この報告書に関しては、文化庁のホームページ等に派遣報告として掲載するなど、広く博物館職員等に成果普及しますので、写真などをおりませ記載していただくよう、お願い致します。